

ランナー・ボランティア・観客が一体となって大会をつくり上げる特徴が浮き彫りに

◎ 第2回大阪マラソン共同調査研究 第1回に続き杉本厚夫・人間健康学部教授らが実施



人間健康学部
杉本 厚夫 教授

第2回大阪マラソンが2012年11月25日に開催され、3万458人(車いす、8.8kmのチャレンジランを含む)のランナーが参加、約9000人もボランティアが活動に携わり、沿道に詰め掛けた観客は118万8000人に上った。「なぜ、これほど盛り上がるのだろうか?」。関西大学では大阪マラソン組織委員会の依頼を受け、人間健康学部の杉本厚夫教授を中心に、読売新聞と共同で参加ランナー、ボランティア、観客にアンケート調査を実施した。

第1回に続き行われた今回の調査によって、回を重ねるに従ってどのような変化があったのかが分かるデータが蓄積され、よりよい大会運営のために役立つデータを提供できるものと考えられる。ここでは3月発表の最終報告を基に分析概要を報告する。

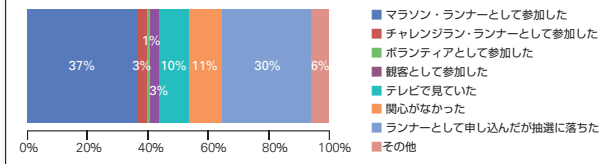
ランナー

参加ランナーの内訳では、第1回にも参加したリピーターが最多で37%。前回、ランナーとして申し込んだが落選して走れなかった人も30%いた。また、観客として参加した人が3%、ボランティアとして参加した人が1%おり、第1回に関わったことで自身もランナーとして走ってみたいと考えられる。

参加理由としては「挑戦したいから」(92%)、「普段は走れないところを走れるから」(88%)、「大阪の観光地を走れるから」(80%)などが多い。

大会後の評価は「一般の観客の応援が励みになった」(99%)「ボランティア等のサポート体制が充実していた」(98%)と回答したランナーが、第1回同様に非常に多い。このデータからも大阪マラソンはランナー、観客、ボランティアが一体となってつくり上げる大会であることがうかがわれる。

第1回大阪マラソンへの参加

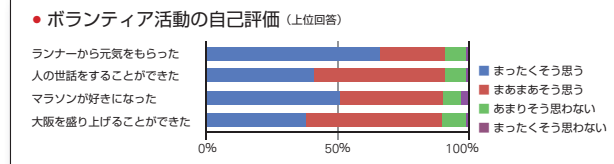


ボランティア

ボランティアの参加動機で最も多かったのは「地域や社会のために役に立ちたい」で87%。「人から勧められたり、誘われたりしたから」という理由が51%で前回の32%から大きく増えた。

第1回には「ボランティアとして参加した」リピーターが34%で最多だったが、次いで多かったのが「観客として参加した」人で25%。昨年から一歩進んで主催者側としてランナーを支えるボランティアを選んだといえる。また前回は「ランナーとして参加

した」人も6%あった。大会後の感想では「ランナーから元気をもらった」と回答した人が91%で最も多かった。



観客

第1回でも「観客」として参加した人が38%おり、リピーター率は高い。また、前回は「テレビで見ていた」人が28%で、大阪マラソンへの興味が高まり、実際に足を運んで応援する人が増えたといえる。観戦理由で最も多かったのは「応援を楽しみたいから」(84%)。「ランナーから元気をもらいたいから」という理由を上げる人もボランティアと同じように多く、76%であった。

調査概要

- 参加ランナー調査
 - 【方法】 Web調査
 - 【時期】 大会前調査 2012年9月14日～10月15日
 - 大会後調査 2012年11月26日～12月10日
 - 【サンプル数】 大会前調査 4917(第1回調査4811)人
 - 大会後調査 7894(第1回調査7006)人
- ボランティア調査
 - 【方法】 大会前調査 集合調査法
 - 大会後調査 ファックスとWeb調査
 - 【時期】 大会前調査 2012年9月29日、10月6日、20日、21日、11月3日、4日、10日、11日
 - 大会後調査 2012年11月25日～12月10日
 - 【サンプル数】 事前調査 897(第1回調査1045)人
 - 事後調査 352(第1回調査1084)人
- 観客調査
 - 【方法】 面接調査法
 - 【時期】 2012年11月25日
 - 【サンプル数】 415(第1回調査467)人

関大院生が制作したPetit DIY住宅 男山団地でモデルルームとして公開

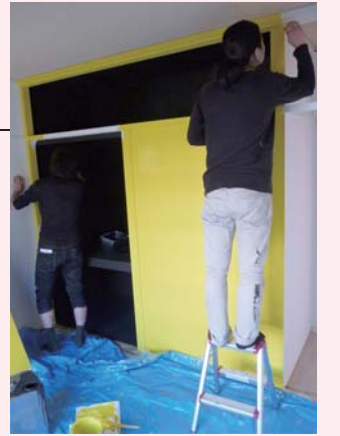
京都府八幡市の男山団地で、関西大学・団地再編プロジェクトの大学院生が壁の塗り替えなどを行った住宅が「Petit DIY住宅」のモデルルームとして公開された。

「Petit DIY住宅」はUR(都市再生機構)が提供する新しいコンセプトの賃貸物件。一般に賃貸住宅の壁紙を変えたり、作りつけの棚を設置するなどした場合、退去時には元に戻さなければならない。ところが、URでは各地に所有する老朽化した団地の一部を、原状回復義務を免除し大幅な改修が可能な「DIY住宅」、少しだけの改修なら可能な「Petit DIY住宅」として供給し始めたのだ。

関西大学先端科学技術推進機構地域再生センターが進める団地再編プロジェクト「集合住宅「団地」の再編(再生・更新)手法に関する技術開発研究」は、地域再生センター長である江川直樹環境都市工学部教授が代表研究者を務め、私立大学戦略的研究基盤形成支援事業に採択された。今回のモデルルームづくりも同プロジェクトの一環として行われた。

プロの職人に学び、壁を鮮やかな赤や青に大胆に塗り替えた関大プロデュースのモデルルームは、劇的な空間の変化を実現しており、部屋を自分らしく演出したい入居希望者のよい参考になっている。

関西大学・団地再編プロジェクトによる
京都府八幡市の男山団地「Petit DIY住宅」



未経験からのアプリ製作、雇用も実現 「すすめ！大槌プロジェクト」で研修支援



◀ 電子書籍「インディアンの森」
▼ 関西大学と支援企業による
人材育成と企業支援の研修風景



関西大学は東日本大震災の被災地、岩手県大槌町と連携し人材育成と起業支援などを目的とした「すすめ！大槌プロジェクト」(正式名称：Sledge Hammer Inspiration Project 略称SHIP)を展開している。このプロジェクトの中で、関西大学と支援企業による研修を受けた研修生3名が製作した電子書籍『イ

ンディアンの森」が、一般社団法人KAI OTSUCHIから2013年1月にリリースされた。

SHIPは2011年度の関西大学「東日本大震災からの復興に関する研究」助成を受けた実践研究としてスタート。2012年7月には本学と大槌町の間で連携協定が締結され、同年8月から在阪のIT企業2社の無償協力でアプリ製作を主としたIT関連技術研修を開始した。研修生はいずれもアプリ製作は未経験だったが、4カ月間の研修で技術を習得し、森田誠二氏の絵本『インディアンの森』をiPad等に向けたアプリとして電子書籍化した。また、研修生から2名の常勤職、4名の非常勤職がそれぞれKAI OTSUCHIに就職することになり、5月7日に本格始業した。

『インディアンの森』は現在、AppStoreで無料配信中。SHIPでは今後、地域の人材によるIT企業の起業から、自律的な運営までをサポートすることを計画している。